

ポストCOVID-19 パリ語学研修

6月末から日本入国時の水際対策が大幅に緩和された。海外から帰国する際の必要書類として「帰国便出発時刻72時間以内のPCR検査陰性証明書」があれば、日本到着後のPCR検査、数日間の空港待機、2週間の自宅隔離と言った厳しい制限が解除された。到着時の公共交通機関利用も可能になり、ほぼコロナ禍以前の状況に戻った。（日本への帰国が楽になった）

日本からの海外渡航が可能となり、日本の学生さんたちの海外研修も3年振りに再開できた。久しぶりのサポートである。

ホームステイをして、パリの語学学校で午前中フランス語の授業、午後から私がパリ市内や近郊を案内する2週間。参加した18歳から20歳の女子学生5名と7月の暑いパリを歩くことになった。

パリ研修サポートを始めて10年以上になるが、今年は予想外のハプニングが次々に起こった。

(1)パリ到着と同時に一人の学生さんが「コロナ濃密接触者」と判明。日本の家族が次々に発熱しコロナ陽性となった。ホームステイに到着と同時に部屋に籠り、潜伏期間を考慮し、三日目にPCR検査に連れて行った。症状もなく幸い陰性で三日目からは授業に参加することができた。

(2)別の生徒さんはスマホの引ったくりに遭ってしまった。7月14日「パリ祭」の出来事だ。フランスは祝日で午前中はシャンゼリゼ通りで軍事パレードが行われる。今年はウクライナ兵がパレードの先頭を歩き、軍事の現実味を帯びた式典となった。シャンゼリゼ通り周辺は人出が多いので、サクレ・クール寺院の高見で戦闘機、ヘリ、軍事旅客機など空のパレードを見た。

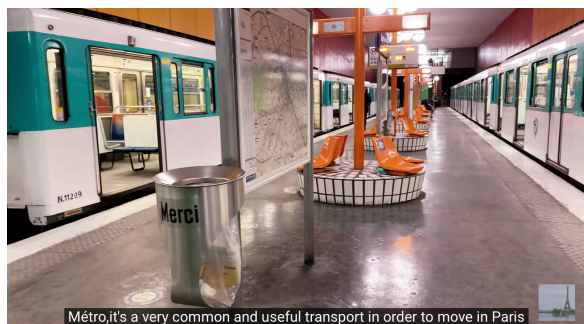
夜は21時からエッフェル塔の足元「シャン・ド・マルス」でパリ市が主催する野外クラシック・コンサートがあり、23時エッフェル塔から花火が打ち上げられる。パリの夏は23時にならないと日が落ちない。30分間続くパリの花火は見事で、遠くから見にくる人も多い。その花火大会を見るためにエッフェル塔の真向かいトロカデロで被害にあった。

夜は女子一人で出歩かないように注意したが、パリの花火を見たかった気持ちはよく分



かる。後で分かったことだが、浴衣を着て見に行ったのである。日本では見慣れた花火大会の浴衣姿も、パリでは目立つ。

観光客が戻ってきたパリはスリや泥棒も戻ってきたことを意味する。一目で日本人と分かる浴衣姿はターゲットになる。二人組の男にスマホを引ったくられた。幸いにも身体への危害がなくほっとした。翌朝警察署に同行して被害届を出し、帰国後保険会社で手続きをするよう説明した。コロナ禍で海外旅行が遠ざかり、引き籠もる生活が3年以上続いたせいだろう。海外旅行に伴うスリや引ったくりへの警戒心をもっと強く言い聞かせるべきだったと反省している。



(3)もう一人はパリのメトロのドアに頭を挟まれるというパプニング。パリのメトロに乗った経験のある人には容易に理解していただけるが、メトロの金属ドアは勢いよく閉まる。時々手や足を挟まれて痛い思いをしている乗客を見かける。幸いホームステイ先で半日休んで痛みも引き、翌日から普通に戻った。

(4)さらにもう一人はヴェルサイユ宮殿に行った翌日アレルギー性の赤い発疹が出た。慌てて薬局に駆け込み、ヴェルサイユ宮殿の庭でダニの一種の虫に噛まれた斑点と判明。当人は蚊に刺されたと思っていたが、手、腕、脚全体に赤い斑点が広がり、アレルギーを抑える薬と塗り薬で症状が治まった。暑いので半袖、短パン姿だった。

今年の7月はパリも記録的な猛暑となり、19日には日陰で41,5度を超えた。外を歩くのは熱中症の危険があり、地球の温暖化、異常気象を肌で感じる一日だった。この日は午前中の授業だけで帰宅し、涼しいところで過ごしてもらった。パリの一般家庭にエアコンはなく、冷房に慣れた学生さんたちは予想していなかった暑さに驚いていた。

コロナ禍で一旦途切れたパリ研修。3年のブランクは思った以上に大きいことに気づいた。そして日本もフランスもコロナ第七波に突入した夏休み、コロナの影響はまだまだ続きそうだ。（古賀順子記）

編者あとがき。

古賀さんの記事は事実であるが控えめな表現で留められています。

これらの四つの事故の処理その他の考えられない責任等が隠れているようですが、若い人たちがこれらの体験を生かして成長されることをひたすら願っております。

このような事故はパリだけではありません。もっと悪質なものもありますが、しっかり対策をとっていくと楽しい旅ができます。個人旅行に不慣れな人はしっかり予備知識を学ぶが必要です。